

## 「コジヤ遺跡の瓦当範」

### 古代のアトリエ跡か 栗山川上流域



▲瓦当範は房総風土記の丘資料館に展示中

市内の伊地山・助沢・高萩・山倉地先などを源とし、太平洋に注ぐ栗山川。この川を望む台地上には、各時代の遺跡が多く存在し、また、低地に立地する栗山川流域遺跡群は縄文時代の丸木舟を出土することで知ら

れています。

今回はこのさらに上流、旧栗源町岩部地区から出土した市指定文化財「瓦当範」（平成13年12月18日指定）を紹介します。

#### 希少な「瓦当範」

昭和60年10月、岩部字コジヤ地先の畑（県道成田小見川鹿島港線と東総有料道路交差付近）から、耕作中に偶然、陶製の「瓦当範」が発見されました。

瓦当範とは、瓦屋根の軒先を飾る軒丸瓦や軒平瓦などの瓦当面をつくるのに使用する「型」のことで、瓦つくりの道具の一つです。日本では、奈良県の飛鳥寺など6世紀末ごろから瓦が

つくられますが、これまで瓦当範は一例も発見されていませんでした。それは、

多くの瓦当範が木製品であるために、長い年月の間に土中で腐ってしまい残らなかったものと思われる。コジヤ遺跡から出土したものは、陶製であったために、

今日まで腐らずに残ったのです。いずれにしても、陶製瓦当範は極めてまれな存在であり、現在のところ、全国で2例だけです。

#### 奈良時代の瓦当範

コジヤ遺跡から出土したのは、軒丸瓦の瓦当範です。直径は12.2cm、高さは5.0cm。窖（トンネル）窯で還元焼成されている

ために、堅く焼き締まり、青灰色をしています。表面を平滑に仕上げ、中央にハスの花を圖案化した「有軸素弁八葉蓮華紋」を陰刻しています。紋様の特徴から奈良時代のものと考えられています

ですが、もう少し時代を古くする意見もあります。残念ながら現在のところ、この瓦当範からつくられた軒丸瓦は一例も発見されていません。

#### コジヤ遺跡は瓦工房跡か

日本の古代において、瓦は一般庶民の家屋に使用されることはなく、もっぱら寺院や官衙（役所）など特別な建物に利用されていました。近隣の岩部大関遺跡

や岩部遺跡からも古瓦が出土しています

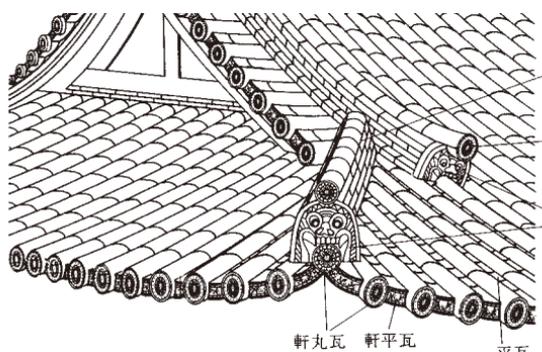
ですが、瓦を葺くような建物跡は発見されていません。

コジヤ遺跡の重要なところは瓦つくりの道具である瓦当範が出土したということです。道具が発見されたという

ことは、この近辺に瓦工房があった可能性も十分に考えられます。近年の調査で、岩部地区より、もう少し上流の福田地区で7世紀前半ごろから須恵器生産が開始されたことが分かっています。

窯業技術に精通した工人集団がこの周辺に居住していたのです。

将来、コジヤ遺跡の近くで、この瓦当範でつくった軒丸瓦を焼いた瓦窯跡が発見されるかも知れません。



▲瓦屋根模式図